

スウェーデンのインクルーシブ教育における 視覚障害児教育の動向

石井 智也¹・内藤 千尋²・田部 絢子³・石川 衣紀⁴・能田 昂⁵
池田 敦子¹・柴田 真緒⁶・高橋 智⁷

(1 : 東海学院大学人間関係学部、2 : 山梨大学大学院総合研究部教育学域、3 : 金沢大学人間社会研究域学校教育系、
4 : 長崎大学教育学部、5 : 尚綱学院大学総合人間科学系、6 : 戸田市立美女木小学校、
7 : 日本大学文理学部教育学科)

要 約

本稿では、視覚障害児のインクルーシブ教育が促進されているスウェーデンにおいて、インクルーシブ教育のもとでどのように視覚障害児の有する多様な発達や生活上の困難やニーズに応じた教育支援が実施されているのか、彼らの生活の質 (QOL) 向上につながっているのかという観点から、当事者の声・支援ニーズに基づきながらスウェーデンのインクルーシブ教育における視覚障害児教育の動向について検討した。

スウェーデンの視覚障害児教育は現在、重複障害を有する視覚障害児の国立視覚障害特別学校イエケスコランを除いて、特別ニーズ教育庁に附設されたリソースセンターや地域のビジョンセンターによる心理社会的支援や補助具・教材の提供を受けながら、基礎学校において視覚障害児教育を受けるインクルーシブ教育が中心となっている。それに対して全国視覚障害協会等の当事者組織は、特別ニーズ教育庁やビジョンセンターと基礎学校との連携が不十分であることや、スウェーデン教育法に「点字を学ぶ権利」を明記するように要求している。実際に視覚障害当事者の意見としても「より多くの若者が点字を学ぶべき」などが示されている。

スウェーデンにおいてはインクルーシブ教育が促進されているが、視覚障害当事者の声や支援ニーズにおいては、一概にインクルーシブ教育のみの促進を求めているわけではないこと、むしろ点字の習得を含めて学びや生活の質 (QOL) の確実な保障を求めていることがうかがえる。日本においても視覚障害児のインクルーシブ教育が試行されているが、当事者の声や支援ニーズを十分にふまえて QOL の向上・改善を可能とする教育支援の検討が不可欠である。

キーワード : スウェーデン, 視覚障害児教育, インクルーシブ教育, 視覚障害当事者, 生活の質 (QOL)

1. はじめに

視覚障害児は読み書きや移動・歩行の困難が生じやすく、多様な学習・発達・生活上の困難・支援ニーズを抱えている。視覚障害を有する子ども・若者の発達機会の保障や生活の質 (QOL) の向上のためには、本人・当事者の声や支援ニーズに基づいた教育支援の取り組みが求められている。

スウェーデン等の北欧諸国ではいち早く、視覚障害児の基礎学校への統合教育 (インテグレーション) やインクルーシブ教育が試行されてきた。スウェーデンの視覚障害児教育については、1986 年にトムテボダ盲学校 (Tomtebodaskolan) が視覚障害児教育のリソースセンターに改組され、原則として視覚障害児は特別学校ではなくて、基礎学校等に在籍することとなった。トムテボ

ダ・リソースセンターでは、基礎学校等に在籍する視覚障害児に対して、点字等の教材提供、相談・カウンセリング、教育調査、能力開発などの教育支援を実施している。

Kim (2016) は、スウェーデンのインクルーシブ教育において少なくない視覚障害児が学校での作業に強いストレスを感じていることや、クラスメートに追いつくことに必死で孤独感を抱えていることを明らかにしている (Kim : 2016)。

スウェーデンにおいては視覚障害児のインクルーシブ教育が促進されているが、そのなかで視覚障害児の有する多様な発達や生活上の困難やニーズに応じた教育支援が実施されているのか、彼らの生活の質 (QOL) 向上に繋がっているのかどうかというような検討はほとんどなされていない。

それゆえに本稿では、視覚障害児のインクルーシブ教育が促進されているスウェーデンにおいて、インクルーシブ教育のもとでどのように視覚障害児の有する多様な発達や生活上の困難やニーズに応じた教育支援が実施されているのか、彼らの生活の質（QOL）向上につながっているのかという観点から、当事者の声・支援ニーズに基づきながらスウェーデンのインクルーシブ教育における視覚障害児教育の動向について検討する。こうした検討は従来の研究においてほぼ皆無である。

なお、筆者ら8名の「北欧福祉国家と子ども・若者の特別ケア」研究チーム（代表：高橋智日本大学文理学部教育学科教授・東京学芸大学名誉教授）はこれまで四半世紀以上にわたり、北欧福祉国家（スウェーデン、デンマーク、ノルウェー、フィンランド、アイスランド）における多様な発達困難を有する子ども・若者の発達支援・特別ケアのあり方について日本との比較調査研究を行ってきたが、本稿もその共同研究の一環である。

2. スウェーデンの視覚障害児教育の歴史的変遷

スウェーデンにおける視覚障害児者の組織的な教育の取り組みについては Borg,P.A. (1776-1839) が先鞭をつけている。Borg,P.A はウプサラ大学で神学や哲学、医学を学んだ後、様々な職を転々として音楽を教えたり、音楽関連の書店を経営した (Riksarkivet ウェブサイト)。そうしたなかで慈善活動に目覚めた Borg,P.A は 1807 年に視覚障害女性の Seyerling,A.C. の指導を開始した。指導の実際の公開を通して、とくに上流階級の人々の関心を集めることになった (石田: 1999, p.44, Synskadades Museum ウェブサイト)。



写真1 Pär Aron Borg (1766-1839)
(Riksarkivet ウェブサイト)

Borg,P.A は国庫補助金を獲得し、1808年にストックホルムに国内初の盲聾院を創設し、視覚障害児者2名と聴覚障害児者6名への教育を開始した。1812年に盲聾院はストックホルムのユールゴーデンにあるマニラに移転し、視覚障害や聴覚障害、知的障害などの多様な困難・障害を有する人々への教育が取り込まれ、1817年には10名の視覚障害児への指導を開始した。「盲児・者を援助し、実際的な方法で慈善を導く」ために「マルガレータ王女盲活動協会」(Kronprinsessan Margaretas Arbetsnämnd för de blinda) の創設につながった (石田: 1999, p.47, KMA ウェブサイト)。

1818年以降、盲聾院では、経済的側面や指導方法の観点から聴覚障害児の教育が中心となり、視覚障害児教育は実施されなかったが、Borg,P.A の息子である Borg, O.E による国会への独自の提案もあって、1846年制定の「盲聾総合院に関する条例」による再規定を経て (石田: 1999, p.48)、マニラ北部に60名収容の教育施設が建設されることになった。この時期の視覚障害児教育は職業的自立に重点が置かれており、点字等の有効な教育手段が利用できなかったこともあり、十分な教育支援は実施されなかった (Synskadades Museum ウェブサイト)。



写真2 ユールゴーデンのマニラに設置された盲聾院
(Synskadades Museum ウェブサイト)

1870年以降、聾啞教育審議会が視覚障害児教育と聴覚障害児教育の分離を提唱したために、1878年に盲教育部はエステルマルムに移転したが、視覚障害児に適した建物や環境ではなかったために、ストックホルム郊外のトムテボーダ王立居住施設が最も適切と判断され、1888年に新しい盲教育院が完成した (石田: 1999, p.48)。

トムテボーダ盲教育院では、1889年9月から約100名の児童生徒への指導が実施され、1896年頃から国民学校の教科目に加えて、概念形成に係る教育や職業教育が実施された。またこの時期にフランスから伝わった点字の利用が始まり、盲教育院内で点字の教科書や書籍を

印刷して点字による教育が取り組まれた (Synskadades Museum ウェブサイト)。

1884年には7歳から10歳の学齢児童を対象にした国立盲教育院がベクショーに設立され (1935年にトムテボーダ盲教育院に統合される)、クリスティーネハムンに18歳以上の視覚障害者を対象にした国立工芸学校が設立された。国立工芸学校では職業自立がめざされ、ブラシ製作、かご細工の技術指導が取り組まれた (Föreningen för byggnadskultur ウェブサイト)。



写真3 クリスティーネハムン国立工芸学校の様子
(Föreningen för byggnadskultur ウェブサイト)

1896年に「盲教育法」が制定され、盲児の教育保障とともに、国民学校の指導についていくことが困難な弱視児にもまた義務教育の保障が定められることになった。1938年の聾学校の国立化に伴い、国の責任で視覚障害教育が取り組まれるとともに (石田: 1999, pp.48-50)、トムテボーダ盲学校を中心としながら、少数の大規模盲学校による視覚障害児教育の整備・拡充がめざされることとなった。

また、重複障害を有する視覚障害児のための寄宿制盲学校はベナースボリやルンドに設置され、エレプロに開設されるイエクスコーランが教育支援を実施することになるが、1950年代以降になると視覚障害児の基礎学校等への就学の可能性が追求され、統合教育が開始されるようになる (Synskadades Museum ウェブサイト)。

1961年に学校教育庁から「重度弱視児が基礎学校に就学できるように、特別な教育学的および技術的援助を行う」ことが通達され、これにより「視覚障害児の特別指導」を実施できる「視覚障害教育相談員」配置、「視覚障害特別学級および特別指導組織」の整備、「補助具、指導教材」の準備、眼科医との協力による保護者や教員への助言等がめざされた。



写真4 ベナースボリの盲学校 (1910年頃)
(<https://digitaltmuseum.se/021015801404/blindskolan-vanersborg>)

国会では盲学校の独立教育体系維持が強調されたものの、少なくない盲学校教師が「視覚障害児のインテグレーションに積極的な考えをもっていたこと」「保護者がこれを支持したこと」「児童生徒が基礎学校に適應することができたこと」「基礎学校教職員もまた重度弱視児のインテグレーションに肯定的な見方をした」こともあって、視覚障害児の基礎学校への統合の試みが上級学年から徐々に初級学年までへと促進されることとなる (石田: 1999, p.114)。

その後、トムテボーダ盲学校の在籍児童生徒数は減少して同校は1986年に廃校となるが、前述のようにリソースセンターとしての機能は残された。1991年に国立教育庁とともに「国立学校障害問題研究所 (Statens institut för handikappfrågor i skolan, SIH)」が開設され、国や地方自治体によって基礎学校における障害を有する子どもの教育支援がめざされ、SIHの視覚障害教育専門家やビジョンコンサルタントがトムテボーダ・リソースセンターとの協同で、学校や家庭と連携しながら視覚障害児の教育支援が取り組まれることとなった。

その後、SIHは廃止されて「国立特別教育研究所 (Specialpedagogiska institutet, SIT)」の開設となり、トムテボーダ・リソースセンターとイエクスコーランはSIT傘下のリソースセンターへと改組された (Niclas Ljungberg: 2019, p.3)。



写真5 廃校となったトムテボダ盲学校

(<https://www.thelancet.com/journals/laninf/article/PIIS1473-3099%2806%2970433-9/fulltext>)



写真6 ビジョンリソースセンター・エレブロ

(Föreningen För Synrehabilitering : 2017、p5)

3. スウェーデンの視覚障害児教育制度

トムテボダ・リソースセンターは現在、「ビジョンリソースセンター・ストックホルム」(Resurscenter Syn, Stockholm) となり、また重複障害をあわせもつ視覚障害児教育担当のイエケスコランは「ビジョンリソースセンター・エレブロ」(Resurscenter Syn, Örebro) に改組されるとともに「特別ニーズ教育庁(Specialpedagogiska skolmyndigheten, SPSM)」の傘下となっている。

特別ニーズ教育庁による視覚障害児教育支援は、①視覚障害児向けのメールや電話で質問できるサービス、②教材等の検索・レビュー、③点字や ICT 機器を利用している視覚障害児向けの能力開発コースの提供、④視覚障害児教育を実施する教師向けのコースの提供、⑤重複障害をあわせもつ視覚障害児対象の国立特別学校イエケスコランの管理・運営、⑥基礎学校等における相談・カウンセリング、特別教育調査等の実施が挙げられる(Niclas Ljungberg : 2019、p.8)。

ビジョンリソースセンター・エレブロには国立視覚障害特別学校イエケスコランが開設されている。イエケスコランは一度廃止となったが保護者等の要望により再開され、21歳までの視覚障害児者の教育支援が取り組まれている(Ekeskolan ウェブサイト)。

全盲等の点字利用者については特別ニーズ教育庁や各地域のビジョンセンターによって配布される点字ディスプレイ・画面読み上げリーダー等を用いて、ワープロ、電子メールの送受信、チャット、インターネット閲覧が可能となり、ICT 機器の完備を前提に視覚障害児は学習に取り組むことができている(Specialpedagogiska skolmyndigheten : 2021、pp.45-47)。

視覚障害児はハビリテーションを受ける権利があり、基礎自治体(コミュニティ)には「ビジョンセンター

(Syncentralen)」が開設されている。ここでは幼児期から高齢期までの生涯を通じた視覚障害支援が取り組みられ、学校を含む日常生活に伴う困難やニーズに応じた教育支援が実施されている。ビジョンセンターは一般に、視覚障害児者が自立した参加型の生活を営むことができるように、①心理社会的支援やカウンセリング、②補助器具の試用とトレーニング、③日常の活動に関するトレーニング、④家族やスタッフ・教師のためのガイダンスと情報提供、⑤フォローアップ等が取り組まれている(Niclas Ljungberg : 2019、p.7)。

例えば、ストックホルム市のビジョンセンター「子ども・若者チーム」では視覚障害を有する子ども・若者を対象に視覚障害に関する検査、視覚機能マッピング、心理社会的支援、カウンセリング、視覚補助器具の提供と利用訓練に取り組んでいる(Stockholms Syncentral ウェブサイト)。子ども・若者チームのスタッフは眼鏡技師(眼鏡作製技能士)、視覚教育家(Synpedagog)、心理士・カウンセラー、IT 教育家(IT-pedagoge)から構成されており、ハビリテーションセンターにおける発達支援とともに就学前学校、基礎学校、自治体、眼科医療、特別ニーズ教育庁との連携がめざされている。

基礎学校では各自治体のビジョンセンターによって作成される個別計画に基づきながら、カウンセラーによる助言・支援、情報提供などを受けて、ICT 機器やデジタル機器を含む多様な補助器具を用いて子どものニーズに応じた教育支援に取り組んでいる。また、各自治体には視覚障害児の活動計画に関するアドバイスや教育ニーズの把握、スタッフ向けの情報提供を行う視覚教育家が配置され、基礎学校の教職員や保護者と協力して、視覚障害児のニーズに応じた支援システムを構築している(Region Gotland ウェブサイト)。

4. スウェーデンの視覚障害児教育の実践

スウェーデンの基礎学校における視覚障害児教育の実践に関しては Niclas Ljungberg (2019) の調査が詳しい。

例えば、基礎学校の 20 名規模のクラスに在籍している低視力 (0.1) と光線過敏症を有している児童 (第 5 学年) の場合、地域のビジョンセンターがクラスの教師や保護者、児童本人へのアドバイスをしており、この児童は読書用テレビと iPad を用いることでテキストを読むことができている。

また、脳性まひを有しており視力低下の著しい児童の場合、視覚障害の他にも多様な困難を有していることから、ハビリテーション、ビジョンセンター、特別ニーズ教育庁の地域アドバイザーと協同で、特別教育家やクラス教師による支援が実施されている。この児童にはコンピュータと iPad の利用が奨励されており、教室にはクローズアップカメラと移動可能なリモートカメラの双方を備えた拡大テレビシステムが完備している。ICT 機器の操作に必要なトレーニングについては地域のビジョンセンターで取り組まれている (Niclas Ljungberg: 2019, pp.18-22)。



写真 7 国立視覚障害特別学校イェケスコーラン

(<https://www.spsm.se/skolalternativ/vara-skolor/ekeskolan/>より)

スウェーデンで唯一の視覚障害特別学校であるイェケスコーランは主に重複障害を有する視覚障害児の教育を実施しており、特別教育家・視覚教育家・眼科医・学校医・学校看護師・心理士・理学療法士などの多様な専門家が協同して子どものニーズに応じた環境調整や教育支援に取り組んでいる (Ekeskolan ウェブサイト)。

イェケスコーランでは視覚障害児が独立性、参加、知識開発を高めることができるように、とくに点字や歩行、移動などの視覚障害特有の困難やニーズに応じた教育支援が重視されており、特別に整備された PC やタブレット

を用いて、音声合成やレコーディング、点字等を駆使しながら、他者とコミュニケーションをとって知識やスキルを習得する機会が提供されている。

また学校までの通学距離が長い子どものために 2 つの宿泊施設が用意されて、社会参加やインクルージョン等の視点が大切にされながら、安心・安全な環境のなかで 24 時間を通した子どもの教育や生活支援が実施されている (特別ニーズ教育庁 SPSM ウェブサイト)。

このようにイェケスコーランでは重複障害を有する視覚障害児の自立や社会参加をめざした教育支援が取り組まれているが、卒業後の生活の課題も残されている。例えば、視覚障害と知的障害を有するジェニーさんは、イェケスコーランの卒業後にパーソナルアシスタントと共に生活をしているが、パーソナルアシスタントが視覚障害者の ICT 機器利活用について知らないこと、またビジョンセンターが ICT 機器を十分に提供できていないことが指摘されている (Föreningen För Synrehabilitering: 2017, pp.20-21)。

5. 視覚障害当事者の声・支援ニーズ

全国視覚障害者協会 (Synskadades Riksförbund) が 2013 年に実施した視覚障害児の保護者調査では、視覚障害児がリソース・パーソンを必要としているにもかかわらず 10 人に 1 人はその割当を得られていないこと、リソース・パーソンがついたとしてもその 3 分の 1 は教育的トレーニングを受けていないこと等の問題が指摘されているほか、学校における子どものアクション・プラン策定等の支援会議に特別ニーズ教育庁や地域のビジョンセンターが関与しているのは半数に留まり、各機関の連携体制も不十分であることなどが指摘されている (Synskadades Riksförbund : 2013, p.3)。

全国視覚障害者協会はスウェーデン教育法に「点字を学ぶ権利」について明記されていないことを厳しく批判しており、「すべての人は読み書きする権利を有しています。点字は読み書きの言語であり、教育、仕事、レジャーで活動的な生活を送るための最良の機会を提供します。音声テキストは点字を完全に置き換えることはできません。点字はスペル、句読点、文の構造の感覚を与えます」と指摘している (Synskadades Riksförbund : 2021)。

15 歳の視覚障害当事者のアリシア (Alicia) さんも「より多くの若者が点字を学ぶべきです」「私は録音図書が好きではなく、『本物』を読みたいです」と語っている (Unga med synnedsättning : 2022)。点字を学ぶ教育機

会が保障されている子どもが多くはない現状に対して、視覚障害当事者の子どもによる点字学習の要求はとてども示唆に富むものである。

さて、スウェーデンにおいて唯一、「視覚通訳者 (syntolkar)」の養成を行っているのが「フェリングスブロー国民大学 (Fellingsbro folkhögskola)」である。視覚通訳とは、目の見える人が視覚障害者のために、実際の生活、画像・映像について伝えることである。この国民大学では 2011 年から視覚通訳者養成コース (1 年間・定員 10 名) を開講しており、映画・演劇・芸術や他の視覚的文脈における視覚的な通訳スクリプトの作成の技法等について実践的に学ぶ。



写真 8 フェリングスブロー国民大学の
視覚通訳者養成コース

(<https://www.fellingsbro.fhsk.se/kurser/syntolksutbildning/>)

6. おわりに

本稿では、視覚障害児のインクルーシブ教育が促進されているスウェーデンにおいて、インクルーシブ教育のもとでどのように視覚障害児の有する多様な発達や生活上の困難やニーズに応じた教育支援が実施されているのか、彼らの生活の質 (QOL) 向上につながっているのかという観点から、当事者の声・支援ニーズに基づきながらスウェーデンのインクルーシブ教育における視覚障害児教育の動向について検討した。

スウェーデンの視覚障害児教育は現在、重複障害を有する視覚障害児の国立視覚障害特別学校イエケスコランを除いて、特別ニーズ教育庁に附設されたリソースセンターや地域のビジョンセンターによる心理社会的支援や補助具・教材の提供を受けながら、基礎学校において視覚障害児教育を受けるインクルーシブ教育が中心となっている。

それに対して全国視覚障害協会等の当事者組織は、特別ニーズ教育庁やビジョンセンターと基礎学校との連携が不十分であることや、スウェーデン教育法に「点字を学ぶ権利」を明記するように要求している。実際に視

覚障害当事者の意見としても「より多くの若者が点字を学ぶべき」などが示されている。

スウェーデンにおいてはインクルーシブ教育が促進されているが、視覚障害当事者の声や支援ニーズにおいては、一概にインクルーシブ教育のみの促進を求めているわけではないこと、むしろ点字の習得を含めて学びや生活の質 (QOL) の確実な保障を求めていることがうかがえる。

日本においても視覚障害児のインクルーシブ教育が試行されているが、当事者の声や支援ニーズを十分にふまえて QOL の向上・改善を可能とする教育支援の検討が不可欠である。

【附記】本稿は高橋の企画提案のもとに、毎週 1 回のオンライン研究会において文献レビューと相互の討議により、著者全員で執筆したものである。なお、本研究は 2019 年度科学研究費補助金基盤研究 C (研究代表: 石川衣紀、基盤 (C) 19K02645) による研究成果の一部である。

文献

Ekeskolan : <https://www.spsm.se/skolalternativ/vara-skolor/ekeskolan/>

Fellingsbro folkhögskola : <https://www.fellingsbro.fhsk.se/>

Föreningen för Byggnadskultur :

<https://byggnadskultur0550.wordpress.com/2020/10/23/blindskolan-i-kristinehamn/>

Föreningen för Synrehabilitering (2017) Nya

Synvärlden,2,pp.20-21.

Hörselskadades Riksförbund : <https://hrf.se/>

池田敦子・田部絢子・石井智也・石川衣紀・内藤千尋・能田 昂・柴田真緒・高橋 智 (2022) スウェーデンにおける病気の子どもの特別教育システムと支援の実際、『東海学院大学研究年報』7、pp. 65-81。

石田祥代 (1999) スウェーデンにおけるインテグレーションの展開に関する歴史的研究、筑波大学博士 (心身障害学) 学位論文。

石井智也・石川衣紀・田部絢子・池田敦子・高橋 智 (2021) スウェーデンにおけるインクルーシブ教育と肢体不自由 (移動障害) 教育の動向、『東海学院大学紀要』15、pp.79-88。

石川衣紀・田部絢子・内藤千尋・石井智也・能田 昂・柴田真緒・高橋 智 (2017) スウェーデンにおける病院内保育とホスピタルプレイセラピー—カロリンス

- カ大学病院アストリッド・リンドグレーン子ども病院の調査を中心に一、『東京学芸大学紀要総合教育科学系Ⅱ』68、pp.115-124。
- 石川衣紀・田部絢子・内藤千尋・池田敦子・石井智也・柴田真緒・能田 昂・田中裕己・高橋 智 (2021) スウェーデンの特別教育における専門行政機関の役割—「特別ニーズ教育庁」の訪問調査から一、『長崎大学教育学部紀要』7、pp.85-93。
- 石川衣紀・田部絢子・高橋 智 (2021) スウェーデンにおける子ども・若者の「不登校・ひきこもり」問題と当事者中心の支援、『長崎大学教育学部紀要』7、pp.95-106。
- 石川衣紀・田部絢子・内藤千尋・池田敦子・石井智也・柴田真緒・能田 昂・田中裕己・高橋 智 (2021) スウェーデンにおける障害者の学び直しと生涯学習・発達の保障—「ヴェスタンヴィーク聴覚障害国民大学 (Västanviks folkhögskola)」の訪問調査から一、『長崎大学教育学部教育実践研究紀要』20、pp.1-10。
- 石川衣紀・田部絢子・内藤千尋・石井智也・能田 昂・高橋 智 (2021) スウェーデンにおける子ども病院と病院内教育の実例—ストックホルム市「サククス子ども病院」の訪問調査から一、『長崎大学教育学部教育実践研究紀要』20、pp.11-19。
- Kim de Verdier (2016) Inclusion in and out of the classroom: A longitudinal study of students with visual impairments in inclusive education. *British Journal of Visual Impairment*. 34(2), pp.132-142.
- KMA : <http://www.stiftelsenkma.com/?page=14>
- Niclas Ljungberg (2019) Fungerande stöd i skolan för elever med synnedsättning—En fallstudie.
- 能田 昂・田部絢子・石井智也・内藤千尋・石川衣紀・池田敦子・高橋 智 (2021) スウェーデンの知的障害特別学校と障害の重い子どもの教育—ストックホルム市のモッカシネン特別基礎学校の訪問調査から一、『尚綱学院大学紀要』82、pp.83-96。
- Region Gotland : <https://www.gotland.se/9299>.
- Riksgymnasiet Örebro :
<https://gymnasieskolor.orebro.se/riksgymnasiet.4.74fcd93163d92d7cac1bed.html>
- Riksarkivet : <https://sok.riksarkivet.se/>
- Specialpedagogiska skolmyndigheten (2021)
Synnedsättning och blindhet—ett orienterande stödmaterial.
- Specialpedagogiska skolmyndigheten (SPSM) :
<https://www.spsm.se/>
- Stockholms Syncentral :
<http://www.sodexohjs.se/syncentralen/>.
- Synskadades Museum : <https://www.srf.nu/om-oss/museet/synskadades-historia/skolor-och-undervisning>
- Synskadades Riksförbundet (2013) Hur funkar stödet i skolan?
https://www.srf.nu/globalassets/allmannadokument/rapporter/hur-funkar-stodet-i-skolan_2013.doc
- Synskadades Riksförbundet (2021) Skriv in rätten till punktskrift i skollagen.
<https://www.altinget.se/artikel/skriv-in-ratten-till-punktskrift-i-skollagen>
- 田部絢子・石井智也・石川衣紀・内藤千尋・能田 昂・池田敦子・高橋 智 (2021) スウェーデンにおけるインクルーシブ教育と知的障害特別高校の意義・役割—ストックホルムの聖エリク特別高校の訪問調査から一、『尚綱学院大学紀要』82、pp.97-109。
- 高橋 智・田部絢子・石川衣紀・内藤千尋・石井智也・能田 昂・柴田真緒 (2018) スウェーデンの高校教育とインクルーシブ教育—ダーラナ県の総合制高校特別教育プログラム・特別高校の調査から一、『東京学芸大学紀要総合教育科学系Ⅱ』69、pp.35-43。
- 高橋 智・石川衣紀・田部絢子・石井智也・能田 昂・内藤千尋・池田敦子・柴田真緒・田中裕己 (2021) スウェーデンにおけるインクルーシブ教育と知的障害特別学校の役割—ストックホルム市の二つの基礎特別学校の訪問調査から一、『日本大学文理学部人文科学研究紀要』102、pp.183-193。
- 高橋 智 (2022) スウェーデンにおける病気の子どもの教育ケアの動向、『障害者問題研究』50(1)、pp.43-48。
- Unga med synnedsättning (2022) Punktskriftens dag.
<https://www.ungsyn.se/aktuellt/punktskriftens-dag/>
(上記のインターネットリソースの最終閲覧は 2022 年 8 月 27 日である)

Trends in Inclusive Education
and Special Needs Education for
Students with Visual
Impairments in Sweden

ISHII Tomoya, NAITOH Chihiro,
TABE Ayako, ISHIKAWA Izumi,
NOHDA Subaru, IKEDA Atsuko,
SHIBATA Mao
and TAKAHASHI Satoru